

中流住宅の平面構成に関する研究

第 10 報 南入り系列平面事例による発展過程の実証的考察 一その 1 借家系・盛岡市(1)

○ 正会員 宮崎 信行*5 同 青木 正夫*1 同 竹下 輝和*2 同 磯貝 道義*3
同 友清 貴和*3 同 宮里 義文*4 同 中園 真人*6 同 岡 俊江*5
同 秋元 一秀*5 同 川崎 光敏*5 同 川島 浩孝*5 同 長嶋 洋子*5

はじめに

以下の 7 編は、昭和 57 年度日本建築学会大会において発表した「中流住宅の平面構成に関する研究(第 1 報~第 9 報)」(No. 5053~5061)の続編であり、地域別、事業所別の平面事例をもとに、発展モデル仮説の検証を試みた報告である。

本報及び次報では、戦前の借家が比較的多く現存している盛岡市の、ある借家経営会社(以下「盛岡借家」と略す)の場合をとりあげ、南入り系列の発展過程を考察する。

① 盛岡借家の概要

盛岡借家は、主として官員や教員等の俸給生活者向けに建てられた借家である。古いものでは明治 19 年のものが現存している。近年、いくつか建物が消失しているため、正確な建設(または取得)棟数は、わからないが、少なくとも 104 棟の存在が確認された。借家建設は、昭和 13 年でストップしている。

建物種別では、一戸建てが 77% を占めてきわめて多い。また、一戸建ての延坪との関係を見ると、20 坪から 30 坪までの規模が最も多い。つまり、比較的小規模な一戸建てを中心に借家建設が進められていたことがわかる。

② 平入りと妻入り

前年度の発展モデル仮説の提示においては、南入り系列と北入り系列、つまり平入りの場合のみをとりあげ、妻入りの場合にはふれなかった。平入りと妻入りとが明治期以後、どのように推移しているか、また、中廊下型平面との関係はどうかを、敷地条件との関係でまず考察する。

(1) A 地区は明治期後半に建設された借家の多い地区である。接道が南北に通じており、敷地は、東西方向に長い。この敷地条件のもとでは、現代ならば、建物を東西方向に配置し、玄関の位置は建物の妻側もしくは端部に設けるのが普通

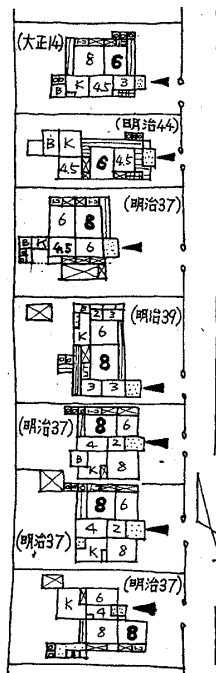


図-1 A地区配置図

建設年代 種別	明治			大正			昭和			不明	合計	
	19年	21~25年	26~30年	31~35年	36~40年	41~45年	9年	14年	15~19年			
一戸建	2	1	3	3	4	6	9	10	22	9	11	80 棟
二戸連続				2		1	2	4	6		4	19 棟
四戸連続							4	1				5 棟
合計	2	1	3	5	4	7	15	15	28	9	15	104 棟

表-1 建物種別建設状況

建設年代 延坪	明治			大正			昭和			不明	合計	
	19年	21~25年	26~30年	31~35年	36~40年	41~45年	9年	14年	15~19年			
20坪未満	1	1	2		2	1	1	4	2	1		15 棟
20~30	1				2	3	6	5	13	3		35 棟
30~40				1		2	2	1	4	5		15 棟
40坪以上			1						1			2 棟
合計	2	1	3	3	4	6	9	10	20	9		67 棟

表-2 1戸建の延坪別建設状況



写真-1 A地区の外観

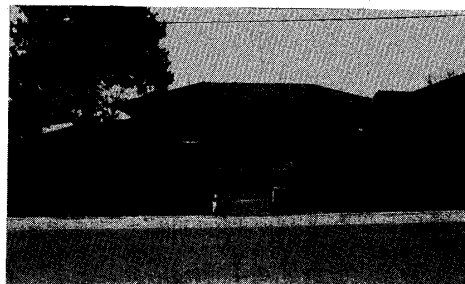


写真-2 B地区の一部

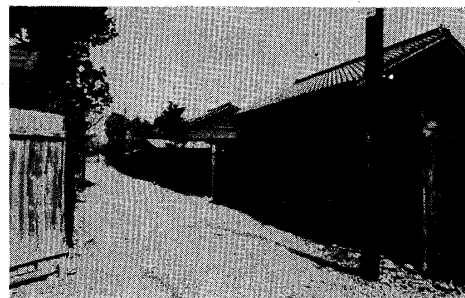


写真-3 C地区の外観

A Study on the Planning of Middle-class Houses

Pt.10 Positive Consideration of the Developmental Process by Cases of

Housing Plan of the Southern Entrance (1) — Morioka City (1)

MIYAZAKI Nobuyuki et al.

であろう。ところが、当地区の建物の場合はそうではなく、南北方向、つまり狭い間口方向に建物を配置している。いわば、アプローチ道路に対して、あえて平入りの形式をとっている。

(2)B地区は大正末期から昭和初めの建物が多い地区である。主要接道は東西方向に通じており、袋小路の取付道路が入りこんでいるため、敷地条件は多様である。建物配置の仕方を見ると、アプローチ道路に対して平入りの形式をとることは、基本的な傾向は前地区と同様である。妻入り形式は、昭和1年のもの、一つである。

(3)C地区は昭和5年から8年までの建物が多い地区である。昭和5年建設の1例を除いて、やはり接道に対して平入りの形式である。この時期になると、座敷の位置が南面する側におかれ、またそのような平面構成がとられている。

(4)最後に、D地区は昭和9年から13年までに建設された地区である。この時期になってようやく妻入りの形式が多くみられる。

接道は東西方向に通じており、一部南北方向に通じている。東西方向の接道をもつ敷地では、前述したC地区の場合とほぼ同じ条件であるにもかかわらず、妻入り形式をとっているから、積極的にそうしていることがわかる。

盛岡借家の場合、昭和8~9年頃に平入りから妻入りに推移したことが比較的明瞭にあらわれている。

ところで、D地区の平面構成をみると、便所・浴室・台所などの諸設備が集中した中廊下型平面である。平入りから妻入りへの推移が、中廊下型平面の形成と軌を一にしていることは注目される。

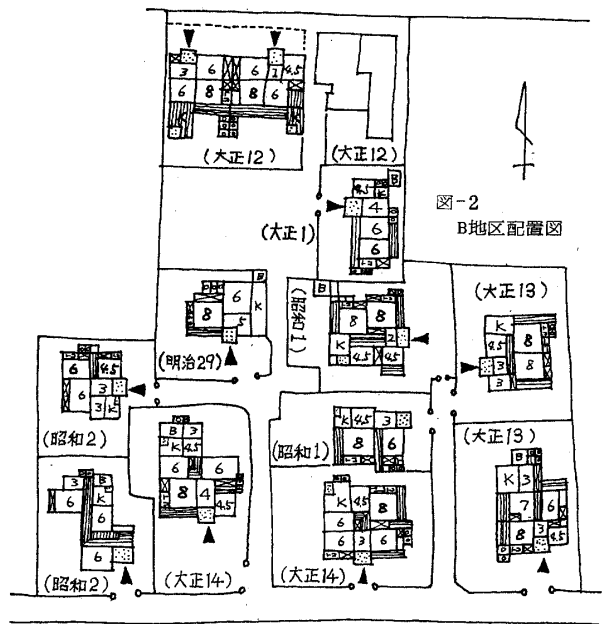


図-2 B地区配置図

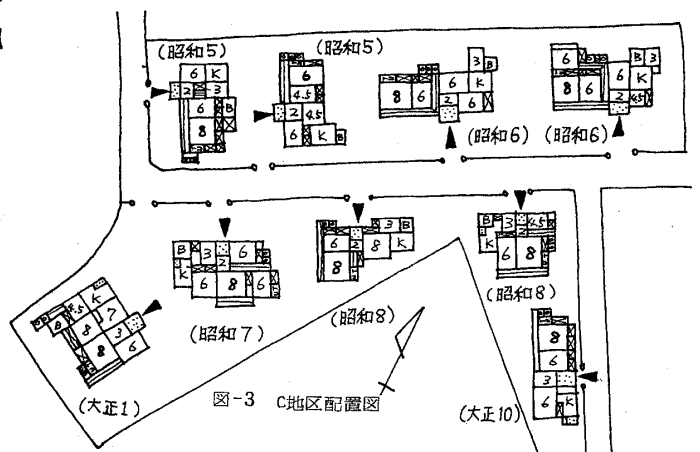


図-3 C地区配置図



写真-4 地区の外観

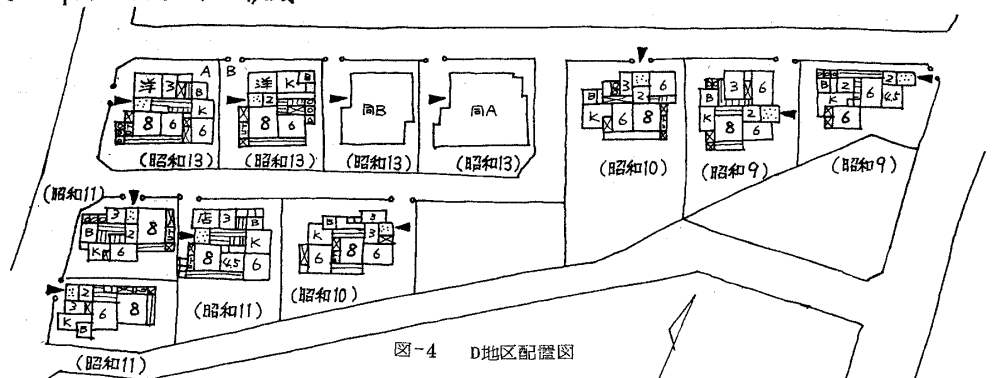


図-4 D地区配置図

*1九大教授・工博 *2同講師 *3同助手 *4同技官 *5同大学院生 *6大分大助手